

[総合的な学習の時間]

地域素材を生かした総合的な学習の単元構成

ー学級みんなで作り上げる伊沢和紙作り活動を通してー

竹田 道則*

1 はじめに

当校は僻地にあり、周辺には田畑や森といった自然が数多くある。また過疎化と出生減により、児童数は年々減少傾向にある。それだけに、地域の人々の「地域の核」としての学校に寄せる期待、「地域の宝」としての子どもを大切に思う心には強いものがある。

まず私は、このような地域で生きる子どもに次のような力を育てたいと考えた。

- (1) 周りに頼ることなく、自分の考えを大切にして主体的に判断し、行動する力
- (2) 自分自身を大切にし、集団の中に入っても自分を見失わない力
- (3) 地域や人を愛し、社会の一員として自分をとらえる力

これらは、当校の子どもが社会に出て自己実現を図るうえで欠かせない重要な力であると考ええる。

このような力を育てていくためには、自分自身をじっくり見つめ、自らをかけがえのない存在として認めていく必要がある。そこで、「総合的な学習の時間」の中心を地域の人や自然・文化・歴史・伝統を学ぶ時間とした。また、生活の基盤である学校区を中心とした地域の「よさ」を知ることが、地域を愛する＝地域の人（家族や自分も含めたすべて）を愛する心につながる。そして、そこに暮らす自分自身のよさにも気付き、自分に自信をもつことができるようになるからである。

また、伊沢和紙¹⁾、松茸太鼓、かさ踊り等、地域でも自らの手で活性化を図ろうとする試みが繰り返し広げられている。地域の人・自然・文化・歴史・伝統などに改めて出会い、それらの「よさ」を子どもが自らの手で追求し、自らの考えを生かして地域に発信することで、地域全体の活性化にも役立つことができる。地域の方々から支えてもらうだけでなく、子どもの活動が地域全体に広がり、認められるようにしたい。この活動が「地域の一員として生きる自覚」にもつながっていくと考える。

本研究の「伊沢和紙作り」は、私の担任する子ども（3・4年生）にとって、とても身近な存在であり、入学当初から全校体験活動として取り組んできたものである²⁾。しかし、体験活動で終わっていたのが現状であった。そこで私は、この「伊沢和紙作り」を「総合的な学習の時間」の素材として生かそうと考えた。そしてこれまで体験するだけで終わっていた活動から、すべて子どもの手による活動にしたいと考えた。そうすることで6年生での卒業証書作りにもより誇りがもてると考えたのである。また、「伊沢和紙作り」に携わる人たちとかかわる活動を通し、その生き方に触れ、地域を愛する心を養いたいと考えた。

「伊沢和紙作り」には以下のような優れた点があると考ええる。

- (1) 「伊沢和紙作り」は毎年経験してきているにもかかわらず、実際の製作過程についてはあまり知られていないため、興味をもって活動に取り組むことが期待できること
- (2) 「伊沢和紙」は完成するまで、様々な工程を経る。トロロアオイ・コウゾ（原料）の栽培、紙すきなど、解決しなければならない課題がはつきりしており、問題解決学習として優れた素材であること
- (3) 「伊沢和紙作り」は一人では到底できない活動である。全員の力を合わせて初めて成し遂げることができるものであり、みんなで取り組んでいるという意識を育てることができる活動であること

このように本研究は「伊沢和紙作り」の体験活動としての利点を生かし、自ら課題を解決していこうとする態度や地域の一員としての自覚（地域を愛する心）を育てることを目的として行う。

* 長岡市立表町小学校

2 研究の目的

本研究は「伊沢和紙作り」を通し、自ら課題を解決していく力を育てるとともに、地域の一員としての自覚（地域を愛する心）を育てることを目的として行う。

3 研究の内容

本研究の目的を達成するために、次の視点から取り組む。

(1) 和紙作り名人と活動に関する打ち合わせを行い、協力体制を得る

「伊沢和紙作り」は、専門的な技術が求められる。そこで、地域にある伊沢和紙工房や伊沢和紙伝承者佐藤勇吉さん、当校で「伊沢和紙作り」をはじめたときからの万羽管理員³⁾に本研究の目的を伝え、協力を依頼する。そして、「伊沢和紙作り」の工程や具体的な協力事項について、綿密に打ち合わせを行ったうえで活動を始める。この協力体制の確保と綿密な計画の立案が、子どもの問題解決学習を確実にサポートすることができると考える。

(2) 子ども自身の手による活動を大切に、「伊沢和紙作り」を進める

3・4年生は全員で11名である。少人数のよさを生かし、学級を1つのグループとし活動を行う。この程度の人数であれば、話し合いも円滑に進むと考える。「伊沢和紙作り」には、トロロアオイ・コウゾの栽培、紙すきなどがあるが、そのすべてを子どもの手で進めていく。

(3) 個々の課題を明確にし、調査活動を進める

「伊沢和紙作り」で生まれる疑問を大切にしたい。それを個々の課題として追求させる。友達がどんな調査活動をしているか気になる場所であるが、それは全体の発表会を設け、共有していく。そうすることにより、集団の一員としての意識が高まると考える。

(4) 調査活動を通し、地域を見つめ、地域を愛する心を養いたい

個々及び全体の調査活動では、伊沢和紙の歴史や伝統、伊沢和紙への思いや願いを理解し、地域を愛する心を養うために、地域に出かけての調査活動を綿密に行う。調査に行く前は、集めたい情報を明らかにしておく。

4 研究の実際

(1) 活動計画（全58時間）

対象とする子ども 3・4年複式学級 男子4名 女子7名（計11名）

時数	活 動 内 容	留 意 事 項
	【課題を見つける】	
3	和紙に関するはてな？を見つける。 今までの和紙作りで疑問に思っていることなどを話し合う。 伊沢和紙工房の見学を行う。 和紙作りの工程に関する質問をしたり、紙すき体験をしたりする。	・今まで学校として取り組んできた和紙作りの様子を写真や新聞などで、十分触れさせる。 ・地域での伊沢和紙作りの復活を願う人たちに触れさせる。
3	トロロアオイを育てる。 昨年度引き継いだ種を使用し、種まきをする。	・困ったときの助けとなる名人との打ち合わせをしっかりとしておく。
6	原料（コウゾ）を調べる。 学校の畑にあるコウゾを調べ、成長を記録する。また、適宜草取りを行う。	・変化を的確に捉えさせるために毎日コウゾの畑に通い、観察を行う。
6	伊沢和紙のルーツを探る。 伊沢和紙の歴史を地域の伝承者の話を聞き、インタビューする。	・聞きたいことをあらかじめ準備しておく。
4	他地域の和紙作り（紙すき）を体験する。 和紙作りをしている門出和紙の見学をする。	・和紙作りで生計を立てている名人に触れさせる。 ・紙すき体験を十分させる。
	【追求する】	
8	トロロアオイの世話をする。 確実に成長するよう、追肥・花摘みをし、収穫する。	・コウゾ同様、毎日観察を行う。
15	和紙作り研究をする。 活動を通し生まれた疑問の追求をする。	・個々の追求の後、全体発表会を行う。

	【まとめる】	
15	伊沢和紙をすく。 コウゾ採り・鹿皮むき・コウゾたたき・紙すき・紙乾燥を行う。	・常に名人と連絡を取れる状態にしており、子ども中心の活動となるようにする。
10	伊沢和紙カレンダーを作る。 活動の様子をカレンダー形式でまとめる。また、学校のホームページで発信する。	・子どもは手書きのカレンダー、指導者が学校のホームページの作成をする。

(2) 和紙作り名人との協力体制を得たことで、和紙作りへの意欲を高めた子ども

「伊沢和紙作り」には、専門的な技術が必要であるため、和紙作り名人の協力が必要であった。地域には伊沢和紙工房がある。また、伊沢和紙伝承者の佐藤勇吉さんが住んでおり、当校の和紙作りを担当していた万羽管理員も隣接校に赴任していた。

そこで、これらの人たちに直接お会いし、本研究の趣旨を説明し協力をお願いした。困ったときにはいつでも協力してくれることを承諾してくださり、伊沢和紙作りの協力体制が整った。

具体的には、伊沢和紙工房の見学、伊沢和紙作りへの助言の2点をお願いした。

伊沢和紙工房の見学（写真1）では、工房での仕事をはじめ、和紙作りはどのような工程を経ているのか、和紙作りに必要な材料及び道具は何か、和紙作りで気を付けているのは何か、を説明していただいた。

また、実際に紙すきを体験させていただいた。特に紙すきでは、「一枚一枚心を込めてすいていること、原料のコウゾをしっかり叩いてきれいな紙になるようにしていること、トロロアオイの根をしっかりとらせるように育てていること、和紙作りは一人では大変なのでみんなで協力して作っていること」をお話していただいた。

また、名人の話を聞く機会をもった。名人の話では、「伊沢和紙の歴史、昔より和紙を必要としなくなったこと、時代に合わずだんだん和紙作りは廃れていったことや昔は子どもが紙すきをやっていたこと、ここ10年くらい伊沢和紙を復活させようとする動きがあること」をお話していただいた。

伊沢和紙工房の見学や名人の話を聞いていく中で、全員が総合的な学習の時間の中で「自分たちの力で伊沢和紙作りをしたい」という願いをもった。

このように、名人たちとの協力体制を確保したことで、和紙作りへの意欲を高めていった。



写真1 伊沢和紙工房を見学している様子

(3) 学級全体の活動を中心に和紙作りを進めたことで、自ら課題を解決しようと活動に取り組んだ子ども

自分たちで「伊沢和紙作り」をすることが決まり、まず、子どもに和紙作りの工程を詳しく説明した。これは、和紙作りに見通しをもって取り組むことができるようにすることと、和紙ができていくまでの課題を明らかにすることで活動を問題解決的に進め、自分たちの力で和紙を作っていることを実感させたかったからである。これ以降、指導者はあくまでも助言をするだけで、すべてを子どもの手に任せるようにした。自分たちの力で課題を解決していった様子を次の3点の活動から紹介する。

コウゾの栽培時には、今までの経験と名人の話より、日光がよくあたるようにしなくてはならないと下草刈りを入念に行った。しかしコウゾはなかなか大きくならなかった。そこで子どもは原因を追求し始めた。調査活動及び話し合いの結果、余分な枝や葉があること、これによって、成長させるべき枝に栄養がいかないことが分かった。そこで、育てたい枝を一つに絞り、他の枝は切断した（写真2）。すると収穫時には立派なコウゾ



写真2 余分な枝を切断する子ども

として成長した。

またトロロアオイの育成時には、根を太らせることが大切だと調査活動で明らかになっていた。そこで間引きや追肥、花摘みを入念に行った。しかし夏を迎えるとき、根が焼けてきていることに気が付いた。子どもはすぐに名人と連絡を取り、原因を探った。すると、根を日光から守るために草や土で覆わなくてはならないことを知った。

紙すきの場面では、水とコウゾ、トロロアオイの分量が問題になった。インターネットで調べたり、名人に取材したりしたが、明確な答えは見つからなかった。なぜなら、特に分量は決まっておらず、経験に裏打ちされた長年の勘に頼っていたからであった。子どもは最大の壁にぶつかることになった。今までは取材で何とか解決できたが、この問題は取材ではどうにもならないことであった。

しかし、今までやってきたことへの自信があった。「伊沢和紙工房での紙すき体験」「門出和紙での紙すき体験」での経験がそうであった。紙すき本番では何度も何度も試しながら、水、トロロアオイ、コウゾを調合していった。何回も失敗しながらの挑戦であった。しかし、絶対に自分たちの力で和紙を完成させようと、くじけず取り組み、最終的には満足のいく紙をすくことができた。

【紙すきを終えての感想】

紙すき本番は本当にドキドキしました。一番むずかしかったのはトロロアオイの入れる量です。手で何回もねりを確かめました。和紙こうぼうでさわったときのネバネバと同じになるようにしました。みんな「これでいい」と思うまでやるのは大変だったけど、きれいに紙をすくことができました。次の紙ほしもがんばりたいです。

このように、和紙作りの工程を示し、自分たちの力で活動を進めたことで、自ら課題を解決していこうとする意欲を高めていった。

(4) 個々の追求を全体で共有することで、集団で取り組んでいる意識を高めた子ども

活動を進めていく中でいくつか疑問が生じてきた。その疑問を個々の課題とし、調査活動を行った。生じた疑問は個人のものではなく、全体のものであることから、11名すべて違う課題を追求することとした。追求の経過を教室内に掲示したり、結果を全体発表会で発表したりし、共有することとした。調査活動の様子を次の2名の様子から紹介する。

トロロアオイの成長の様子を知りたいと考えたA子は種まきをしてから毎日畑に通い、変化の様子を記録していた。これは収穫するまで続いた。記録は成長日記とし、全体発表会で発表するとともに教室内に掲示しておいた。そのことによりトロロアオイの変化を学級全体で共有することができたとともに、間引きや花摘み(写真3)、種とりの時期を逃さず、取り組むことができた。



写真3 トロロアオイの花摘みをする子ども

また、普段何気なく使っている紙(洋紙)と和紙に興味をもったB子は、夏休みの自由研究で調査を行った。洋紙は機械で大量生産していること、和紙作りは名人が一枚一枚手作業で行っていることを理解した。また、和紙の方が水などに対する強度が強く、何年経っても使用できることを明らかにしていた。発表を聞いていく中で、一枚一枚心を込めて作っている和紙を無駄遣いしてはならないと考えるようになった。

このように、個々の課題の追求をした後、結果を共有することで、みんな(集団)で取り組んでいるという意識が生まれる。また学級への所属感を育てることにつながった。

(5) 地域の調査活動を通し、伊沢和紙の歴史や伝統、思いや願いを知り、地域を愛する心をもった子ども

個人の課題追求及び和紙作りで困ったことがあったとき、地域へ出かけての調査活動を行った。この調査活動を通して、伊沢和紙の歴史や伝統、思いや願いを知ることとなった。また、それらを通し、伊沢地区に生まれてよかったなどの気付きを得た。その様子を紹介する。

名人の話聞く場面では、「伊沢和紙作りは昭和42年で途絶えてしまったのです。必要なくなったので、そのころの道具も燃やしてしまった。しかし、学校が復活させたいと話をもち出し、協力することになったのです。今の時代

に生かす紙作りを考えるのが難しかったけど、熱意に負けて協力することにしました。道具の準備、原料の調達が一番難しかった。自分でも役に立てると思い、今はやっています」という話を聞き、子どもは伝統が途絶えたことに驚き、それを復活させることへの情熱を感じ、地域の伝統に力を入れている名人の熱意、和紙作りに対する情熱を感じた。そんな人たちがいる地域に住んでいることへの誇りと喜びを感じることができた。

コウゾが年々少なくなっていることの原因を調査していた子どもは、伊沢和紙工房へ出かけて調査を行った。その中で、「コウゾが根付き、原料として使えるようになるには数年かかる」ことを知った。また、学校の畑にあるコウゾは「13年前から生育されている」ことも知った。これも地域を愛する人たちの報酬を期待しない活動であった。

【調査活動を終えての振り返り】

コウゾは伊沢地区に神様が授けてくれたものだと思う。学校のコウゾがなくならないよう、世話をしなくてはならないと思いました。また、コウゾが育つよう自然も大切にしたいです。

このように地域のために和紙作りに専心する人たちに直接触れることで、地域への愛着を深めていった。

5 考察

(1) 「自分たちの力で伊沢和紙を作ること」にこだわることで、自分の課題解決に向かって最後まで粘り強く取り組む力が高まる

今まで伊沢和紙作りに全面協力していた万羽管理員の転勤に伴い、和紙作りの工程もよく分からず、和紙が完成するかどうか心配になった。しかし、自分たちが6年生になったとき、伊沢和紙で卒業証書をすきたいと考えていた。そのためには今から準備していかななくてはならないと考えた。しかし、作業など一人の力では到底できないとも感じていた。そこで、みんなで力を合わせて伊沢和紙をすけるようになると、確認し合った。

「トロロアオイの栽培、コウゾの手入れ、コウゾ蒸し、鹿皮むき、紙すき」など、初めての経験ばかりで活動に行き詰ることが多くあった。そんなときも「自分たちの力で」を合言葉にあきらめることなく、分からないことは佐藤名人、万羽管理員にインタビューしたり、自分たちで試行錯誤したりし、できるようになった。これで何とか6年生になったとき、卒業証書がすけそうだと少し自信をもつことができた。

(2) 活動のたびに自分の活動の振り返りをするすることで、より良く生きる方法を考える力が高まる

振り返りカードを用意し、1つ1つの活動を終えるたびに振り返りを欠かさず行った。カードを使い振り返りを行ったため、振り返りの視点が明確になった。また、自分の成長を確認するため、評価項目は固定した。そうしたこと、的確に自分の活動を振り返ることができるようになった。

振り返りをしていく中で、活動を重ねるたびに成長していく自分に気付くことができた。「友達と協力することで助け合うことの大切さを感じ、家の手伝いをするようになった」子ども、「自分の発表をより分かりやすくするために丁寧な字で発表原稿を作成した。普段の学習においても丁寧な字を書くようになった」子ども、などよりよい自分を求める子どもが増えた。単元を終えて次のような振り返りをしていた。

【単元を終えての振り返り】

今までわたしは家の手伝いをしていませんでした。和紙作りは、みんなで協力したからできたと思います。また、和紙作りをみんなでやったおかげで、協力することの大切さを知りました。だから、今度からは、家の手伝いを毎日したいです。

(3) 何回も経験することで、伊沢和紙を作る技術を身に付けることができる

子どもは何よりも3月の紙をすく場面での失敗を恐れていた。そこで伊沢和紙工房での紙すき体験、門出和紙での紙すき体験など、できるだけたくさんの経験をした。

初めは失敗を恐れていたけれども、何回も経験していく中で、「上手くなった、分かってきた、これならできそう」と自信をもつことができるようになった。

またトロロアオイの栽培・コウゾの手入れも、しっかり生長したトロロアオイの根、コウゾの幹の太さを見て自分たちの活動に満足することができた。これから当校の伝統になっていこう「伊沢和紙作り」の伝承に役買ったと考えることができた。和紙作りを終えて、C男は次のような感想を書いている。

【和紙作りを終えてのC男の感想文（抜粋）】

「万羽さんがいなくなって、伊沢和紙ができるのか心配になりました。でも門出和紙や和紙工房で何回も和紙作りのことを聞いたり、すいたりして自信が付きました。とってもきれいな和紙をすくことができ満足です。やってよかったと思いました。来年も再来年も和紙作りをがんばります」

（4）地域素材を学習材とすることで、地域を見つめ、地域を愛する心をはぐくむことができる

調査活動を通し、伊沢和紙作りの伝統が途絶えたことを知った。それを復活させることへの情熱を感じ、地域の伝統に力を入れている名人の熱意、和紙作りに対する情熱を感じた。そんな人たちがいる地域に住んでいることへの誇りと喜びを感じることができた。

また、名人たちの気持ちが込められていて、様々な工程を経て完成する和紙を普段使っている洋紙と同じように使ってはならないとを感じるようになった。そして、洋紙も大量生産はされているが、リサイクルなどを心がけ、大切に使用しなくてはならないと考えるようになった。

6 課題

個人の課題解決では、図書室の本、インターネット、インタビューによる解決方法を講じたのだが、3・4年生にとっては難しい語句が多すぎて、確実な理解にまでは至らなかったと考える。また、絶対的な文献の数も少なかった。そのような中で、活動意欲を失いかけた子どももいた。どう課題解決の支援をしていくべきなのか考えなければならない。そして、こうした内容を子どもが理解できる手立てを考えていく必要がある。

また、和紙作りにおいて子どもにどこまで要求するかを指導者がもっていることが大切である。和紙作り道具の準備など、子どもだけではできないものもある。活動の目的と照らし合わせて、子どもにどこまで要求するかをきちんと決めておく必要がある。

脚注

1) 伊沢和紙

コウゾ（クワ科の落葉低木）を原料とする和紙。繊維が長めで、丈夫な紙に仕上がるとされる。縦一尺二分、横一尺四寸（約309mm×420mm）の大きさ。地域の名称である「伊沢」をとり「伊沢判」として、生産していた。江戸時代に、長野県の「内山紙」の技術が伝えられたものであると言われている。昭和30年代後半に、伊沢地域での紙すき産業は途絶えた。伊沢地域では途絶えた和紙作りであったが、その技術は、高柳門出、小国へと伝わり、「伊沢紙」として名前は残っていた。

平成2年に当校で伊沢和紙をすいて卒業証書を作ったのがきっかけとなり、平成15年、地域での復活を願って、伊沢和紙工房「櫨」が開設された。

2) 当校の伊沢和紙作り

全校体験活動として教育活動に位置付けられている。6年生になると伊沢和紙で卒業証書を作ることが当校の伝統になっている。その卒業証書作りは、地域・保護者・教職員・子どもの誇りであり、この伝統が引き継がれることを願っている。

3) 万羽管理員

平成2年に当校で卒業証書をすいたときからの管理員。当校における「伊沢和紙作り」の歴史、和紙作りの工程を知っている。教職員と協力しながら和紙作りを行っていたが、本研究を行った前年度に隣接校に転動した。

参考文献

- 1) 文部科学省、小学校学習指導要領、2003年
- 2) 新潟県教育委員会、「総合的な学習の時間」のガイドライン、2001年